

作家  
学校法人自由学園理事長  
水木 楊  
みずき よう



### 「本の読み方は」

本の読み方は、年代によってどうやら異なるようだ。若い頃は手当たり次第に読んだ。ドノトエフスキーの「罪と罰」やトルストイの「戦争と平和」、ロジュー・マルタンテュガールの「チポー家の人々」などの大作も二気に読んだ。夏目漱石、島崎藤村、太宰治、芥川龍之介、森岡外、田山花袋……日本の小説も殆ど読んだ。経済書ではアダム・スミスやリカード、マシヤルなども翻訳書ではあるが、読破した。エネルギーが有り余っていたのだ。だが、夜打ち朝駆けに追われる新聞記者になつてからは、仕事で役に立つ本が読書の中心になつてしまった。読みたい本よりも、読まなければなら

本で精一杯になったのだ。その場合でも、読み飛ばす本とじっくり読む本とに分かれる。読み飛ばす本は、「ながら族」で、電車や風田の中などで読む。必要な部分に赤い線を引くから、古本屋では売れない。そんな時代が過ぎて、作家として一本立ちしてから、読まなければならぬ本に読みたい本も加わつた。昔読んだ本をもう一度ひっくり返してみることも多くなった。いま、七十三歳となり、老境とも言える年代を迎え、ふと気づくと、もう大作を読破するエネルギーは失われつつあることに気づく。読み出しはするのだが、文中にある「これ」が「これ」か、「これ」か、「これ」か、途途中で他のことを考え始めてしま

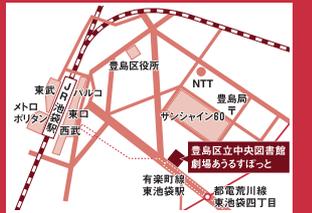
# と しょ かん つう しん 図書館通信

#### トピックス

- 巻頭言 作家/学校法人自由学園理事長 水木楊・・・1ページ
- 図書館と私 池袋図書館運営専門員 狩野住江・・・2ページ
- ザ・レファレンス 郷土資料館学芸員 秋山伸一・・・2ページ
- 生涯の一冊 豊島区図書館経営協議会委員 栗原由美子・・・2ページ
- 中学生職場体験から・・・3ページ
- 赤い鳥文学賞の終了にあたって(2) 小峰紀雄・・・3ページ
- 豊島区伝説工芸 漆工芸 橋本允宏・・・3ページ
- 図書館イベント情報・図書館カレンダー・・・4ページ



発行 ● 豊島区立中央図書館  
東京都豊島区東池袋四一五一一  
ライオンリーナビル四階・五階 〒170-8441  
電話 ● 03-3998-3786  
FAX ● 03-3998-3990  
ホームページ ● <http://www.library.toshima.tokyo.jp>  
発行日 ● 平成23年1月



## 新航路 [17]

## 読書で心を豊かに

読書は心の栄養  
よい本を読めば、やさしい気持ちが心にたまる  
ただしい気持ちが心にたまる  
強い力が心にたまる  
広い知識が心にたまる

すばらしい本との出会いは心を豊かにしてくれます。今年も本のある生活で心にたくさん感動をためませんか。図書館では皆さんのご来館を職員一同お待ちしております。本年も豊島区立図書館を、どうぞよろしく願いたします。

豊島区立中央図書館長 鈴木 達

まつたのだ。考えてみれば、人間付き合いと同じである。新聞記者の現役時代には会いたくない人にも会わなければならなかったが、歳を取ると、会いたくない人には会わなくなってしまうのだ。だから、枕元には読みたい本だけが積んである。本は寝ながら読むことが多い。ところが、その読みたい本がまたうす高く溜まる。ときどき崩れて頭に降りかかってくる。まるで「早く読め」と叱られているようだ。仕方なく、ときどき整理する。すると、六十歳を越えてから今にいたるまで、読みたい本そのものが変わってきていることに気づく。これが先づきのように変わっていくのが、読書はまさに、その人の歴史である。

## Current & Encounter

### 「人間社会への儀礼と格式について」

豊島区図書館行政政策顧問 粕谷 一希

**伝統を考える**  
中央図書館のすぐ近く、グリーン大通りに面して豊島岡女子学園がある。その校長は二木謙二氏であるが、同氏はながく国学院大学で日本史の教授をされた。これはめずらしいテーマで、経済史・政治史・社会史の研究者が多いなかで変わった存在である。折口信夫を出した国学院大学であればこそできたことなのだろう。

日本の武家社会は鎌倉以来だが、室町時代に大きく様相を変え、戦国時代には、それまでの地頭大名が減り、戦国大名が全国を制覇する。この戦国時代は誰しも死を覚悟した明日もわからぬ社会だった。その中で、茶や花が珍重され、儀礼・格式が重んじられた。そのことを抜きにしてのちの武士道の観念は生まれてこなかったろう。

人間、死を前にして、儀礼・格式に拘ったのは、それを別にして、人間の生死を納得する方法がなかったからなのだろう。儀礼・格式こそ、人間社会の伝統を形成してゆく核心である。そしてこのことは、形を変えて今日でも生きている。人間という不確かな生物が共同体を形成して、幾世代にもわたって生き続けているのは、人間関係を拘束するものとして儀礼・格式があるからである。冠婚葬祭といった仕切りは、人間の智慧が生み出した工夫なのだろう。

**お祭りの楽しさ**  
いまや、家族や地域社会、学校、病院、神社、佛閣といったものまで崩壊しかかっているが、それだけにそのシステムがよく見えてくる。いまや必要なのは革新ではなく、伝統の保守かもしれない。

鬼子母神の御会式は毎年賑やかだが、戦前からのお祭りであつて子供たちには忘れがたい。各地から万灯が集まってくるが、その中には池上の本門寺からのものもあつて驚嘆したことがある。境内中に商店が並んで、金魚すくいから綿菓子まで子供たちの目を奪った。戦前には口口首という不思議なものまであつて怖かつたが楽しかつた。

こうした何げないお祭りにも、人間の智慧の結晶が詰まっている。インテリはみんな逃げて歩いたものだが、三島由紀夫がハッピーを着て万灯をかかげたことがあつた。彼一流の問いかけだが、たしかにみんな万灯をかかげる気持ちになつてみることも必要かもしれない。

有贈故買という言葉があつた。昔は、クダラン、と考えていたが、武家たちがこぞで求めたという儀礼が、なぜ必要だったのか、最近になって少しづつ解りかけてきた。そうした少いづつ解りかけてきた。人間社会は秩序を保てなければ、人間社会は秩序を保てなければならぬ。戦国時代、武家社会がひっくり返り、生と死のストレスの間を生きた人々が、その残酷さを身にしみて解つたからこそ、儀礼を求めたのだらう。今日もそのことと似ていないだろうか。

水木楊(本名・市岡揚一郎)昭和12年上海生まれ。昭和35年4月 日本経済新聞社入社、ワシントン支局長、取締役論説主幹などを歴任。平成11年4月に退社、作家として独立。平成21年4月 学校法人・自由学園理事長に就任。『会社が消えた日』(日本経済新聞社)、『北京炎上』(文芸春秋社)など著書多数。